

盾の両面を見よ

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
常務理事 佐々木 健



今回、埼玉県診療放射線技師会会誌の巻頭言を任されるに当たり、どんな内容にしようか考えていると、とあるオリンピックが「特攻資料館に行きたい」と発言したことが話題に上がっていた。とある動画配信サービスで高評価の映画に特攻を題材にした邦画があり、きっとこれを観たのだろうと想像してみた。私も今年の7月に鹿児島で開催されたとある学会に参加した際、知覧特攻平和会館に立ち寄り、特攻について深く考える機会があった。国のために殉じるということは令和の時代では受け入れられないことであろうが、太平洋戦争中は教育や世論によって受け入れざるを得ない状況があったのだろうと推察する。

一昔前のとある映画で特攻と自爆テロが同一に語られ、主役の若い男性が激昂する一幕があったが、日本では特攻の目的や精神が理解されているため、特攻と自爆テロは違うという意見が多い。一方、海外では自らの命を犠牲にして目的を果たすことが自爆と同一であると捉え

られ「カミカゼ」という言葉でも表現されるようになっている。このように、特攻に近い立場と離れた立場では捉え方が異なるし、時代が異なれば日本でも特攻と自爆テロを同一に捉えられることもあるだろう。

日本でも太平洋戦争から約80年が経ち、当時を語ることができる方も少なくなった。歴史として太平洋戦争や特攻を学習するだけでなく、関心を持って学ぶことで片側の意見だけでなくさまざまな視点の考えを知ることができる。先日、とある中学校で放射線特別授業を行った際に、東日本大震災について紙面上でしか知らない世代に、放射線の怖さを理解してもらうことが難しいと感じた。放射線の安全性だけでなく危険な面も診療放射線技師が正しく伝えていくことが必要であろう。このように、何事も両面を理解して正しく伝えることは大変意味深いと改めて考えることができた。最後に本文では「とある」を意図的に多用してみたが、なぜだろうか両面から想像していただきたい。